

武蔵野と大東京の「辺境」

文人の
武蔵野

村上春樹 ⑧

武蔵野を愛した文人・田山花袋に師事した作家の白石実三に「武蔵野から大東京へ」（1933年）という本があります。

現在「東京」と認識されているエリアはかつて武蔵野でした。武蔵野のエリアは徐々に東京に侵食され、東京が拡張されて大東京が生成し、「武蔵野から大東京へ」と言われるようにな

りました。大東京の外延に「いるのがわかります。武蔵野がイメージされ、特に西の外れの郊外が武蔵野らしい場所として語られるようになりました。」

村上春樹の「武蔵境のありくい」に登場する新小岩の叔父さんは、「新宿より西側の東京」に偏見を持ち、毛嫌いしています。

彼が「電車に乗って、大東京を端っこから端っこまで横切って、武蔵境くんだりまでわざわざ麻雀を打ちに行った」と「大東京」と

の関係において武蔵境を語るとき、背景に「武蔵野から大東京へ」という地政学的認識の推移があることがみてとれ、武蔵境を「辺境」としての武蔵野だと捉えて

叔父さんは、武蔵境では「駅の改札で狸が帽子をかぶって偉そうに切符切りをやった」と主張し、いかに「見渡す限り野っ原」だったかを夏帆に伝えます。

夏帆は、ありくいがシロアリの密輸品を購入していることを知り、武蔵境は「文明の果つるところだ」という叔父さんの言葉を「そのとおりかもしれない」と思

作中の夏帆が引っ越した「武蔵境の駅からバスに乗って十五分ほどのところにある平屋の一軒家」は、バ

武蔵境の駅前。作品では夏帆がバスを利用する（武蔵野市で）



は、武蔵境でさえないのかもしれない。

いつから武蔵境の駅からバスが走るようになったのか、正確なことは定かではありませんが、旧保谷町にあった武蔵野女子学院の卒業生によると、かつては武蔵

境駅から徒歩で通学し、遅刻しそうになると、往來する馬車の荷台に乗せてもらうこともあったそうです。

同学院は現在、武蔵野大学として西東京市にあり、武蔵境駅からバスで7分ほどです。狸の切符切りはいませんが、狸は今でも見かけます。

（敬称略）

（武蔵野大教授、むさしの野文学館館長・土屋忍）

*

過去の連載は、読売新聞オンラインでお読みいただけます。スマートフォンは

QRコードから。

